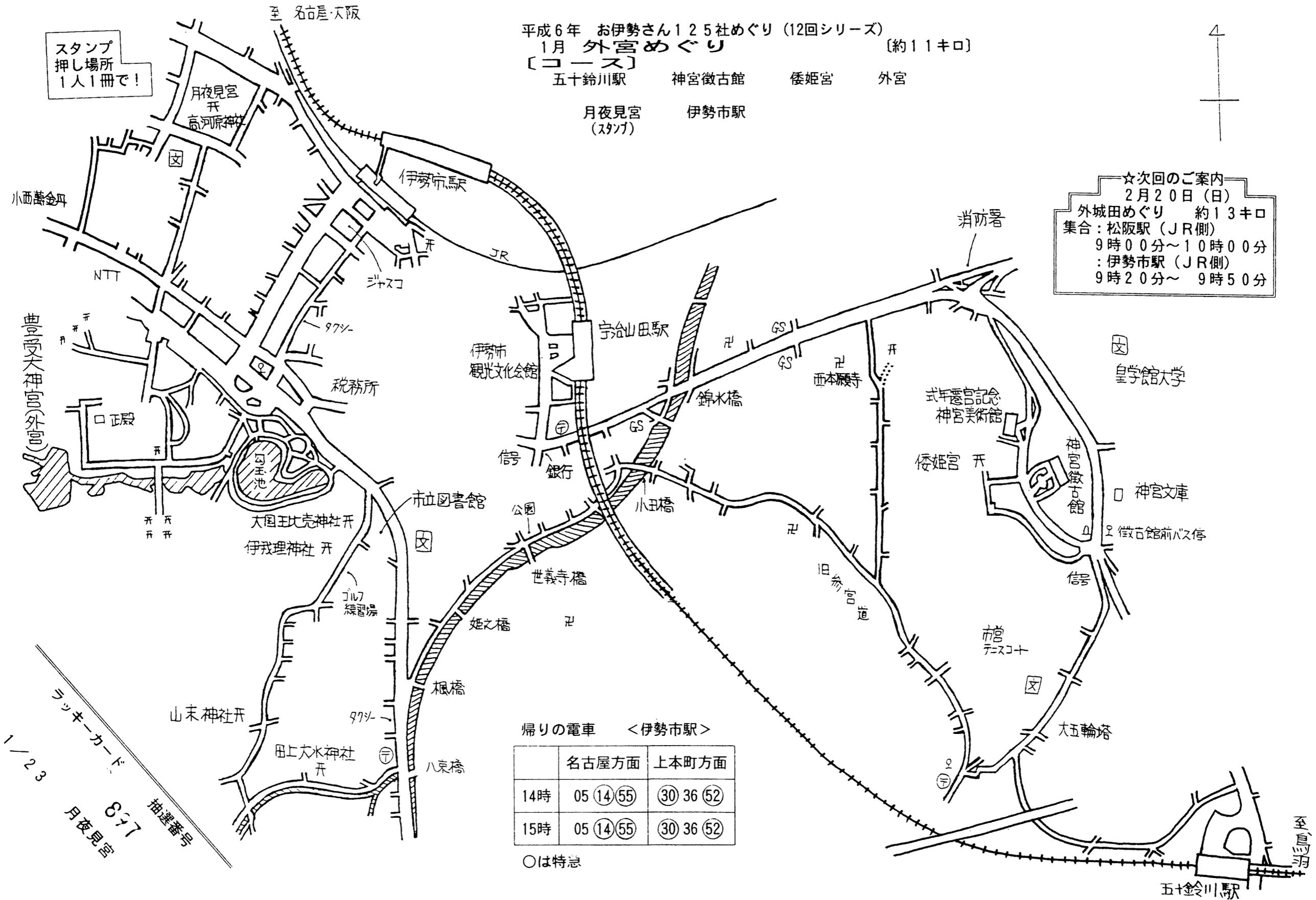


平成6年 お伊勢さん125社めぐり (12回シリーズ)
 1月 外宮めぐり [コース] (約11キロ)
 五十鈴川駅 神宮徴古館 倭姫宮 外宮
 月夜見宮 (スタンプ) 伊勢市駅

スタンプ
押し場所
1人1冊で!



☆次回のご案内
 2月20日(日)
 外城田めぐり 約13キロ
 集合: 松阪駅(JR側)
 9時00分~10時00分
 : 伊勢市駅(JR側)
 9時20分~9時50分



帰りの電車 <伊勢市駅>

	名古屋方面	上本町方面
14時	05 (14) (55)	(30) 36 (52)
15時	05 (14) (55)	(30) 36 (52)

○は特急

ラッキーカード
 1/23
 抽選番号
 897
 月夜見宮

○大五輪塔（室町時代）

無銘。造立については諸説がある。あるいは延徳元年（1489）ごろの宇治山田合戦の際の、山田方の戦死者の合同供養塔ではあるまいか。本塔の形式からその期ないし、それに近いものであろう。古塔では三重県下最大（総高340.00m）

○神宮文庫・福島みさき大夫門

神宮の所管する図書館。明治三十九年（1906）、内宮に近い宇治館町に設立されたが、大正十四年（1925）倉田山に移設されて現在に至る。林崎文庫、豊宮崎文庫などの旧蔵書も収め、20万冊を超える蔵書を有している。国宝の玉篇をはじめ、貴重な書物が多い。

なお、この文庫の門は、八日市場町にあった御師、福島みさき大夫邸の門をうつしたものである。

一間一戸、薬医門。樺材、瓦葺き。梁に安永9年（1780）の銘あり。福島みさき大夫の安永6年（1777）檀家数約185,000軒

○葉山大夫門

一間一戸、薬医門。樺材、瓦葺き。元亀谷病院（現慶応病院）の門。昭和36年神宮に献納。鬼瓦に嘉永6年（1853）の銘あり。葉山大夫は、元禄年間山田年寄家の一つ。

◎倭姫宮

倭姫命は、第十一代垂仁天皇の皇女で、天照大御神の鎮まる地を五十鈴川の川上に定められた。倭建命の叔母で、倭建命が東国征伐の際、草薙剣と火打石の入った袋を授け、危難を救ったことでも知られる。

この功績にもかかわらず、倭姫命をお祭りする社がなかったことから、神宮及び伊勢の人々が創立の運動を起こし、大正十二年（1924）この地に鎮座した。

○神宮徴古館・美術館

徴古館は、

神宮関係資料を中心に、歴史資料及び現代美術品を展示・収蔵する総合的な歴史・美術博物館である。片山東熊・高山幸次郎の設計で明治42年5月の竣工。創立は（財）神苑会、明治44年神宮に献納された。明治42年はやはりこの二人の設計で赤坂離宮が完成している。

中央のホールに貴賓室をおき、左右を陳列室として、その両翼を前方に張り出した左右対称の建築である。現在の建物は昭和28年改築されたもので、鉄筋コンクリート、一部鉄骨で補強し、2階を設け、屋根は大きく変

えられた。かつての中央ホールのドームは取り除かれ、この部分の正面を切妻とした以外はすべて寄棟となっている。

神宮美術館は、

第61回式年遷宮（平成5年）を記念して建設。

今回の遷宮に奉賛して当代最高の美術・工芸家（文化勲章受章者、日本芸術院会員・重要無形文化財保持者）から献納された絵画・書・彫塑・工芸を展示する。

将来は遷宮が行なわれる20年ごとにその時代を代表する秀作を収めて、我が国の美術史が展望できる全国に類をみない美の殿堂をめざす。

（概要）

建設用地	神宮農業館跡地	伊勢市神田久志本町
構造	鉄筋コンクリート造・一部鉄骨造 地上1階、一部2階・地下2階	
形態	銅版葺勾配屋根を持つ日本の伝統をふまえた現代建築	
敷地面積	15,136 m ²	
建築面積	約3,026 m ²	
展示面積	展示室(1) 352 m ²	展示室(2) 421 m ² 展示室(3) 138 m ²
竣工	平成4年11月17日	
開館	平成5年10月1日	

○日蓮聖人誓の井戸

日蓮誓願の井戸 日蓮は鎌倉時代の僧、延暦寺その他で修行し、建長五年(1253)日蓮宗を開いた。建長二年に伊勢を訪れ、この誓願の井戸に水垢離をとり、神宮に誓願したと伝えられる。

現在、井戸のそばに塔が建てられており、次の文字が刻まれている。

我為日本之柱 我為日本之大船 我為日本之眼目

○倭姫命御陵伝承地（尾部古墳）

方墳、横穴式石室があった。銅環、鈴、高杯、鉄器残片など出土。

「倭姫命世紀」の記述から、倭姫命御陵伝承地といわれているが、松木時彦氏は、度会神主二門の祖神主・飛鳥の墳であろうとしている。

○隠岡遺跡

隠岡遺跡の発掘調査は、昭和58年の市営住宅建設にともなう事前調査として約2,300 m²が発掘され、大きな成果をあげた。

宮川右岸で、しかも神宮周辺地において初検出となった弥生時代の遺構は、竪穴住居18棟、主幹排水路が検出され、弥生時代後期の文化は宮川を南下していることが明確となり、市街地を流れる勢田川の沖積地を見下ろす台地上に「むら」が形成されていたことが判明した。

また、平安時代後半掘立柱建物9棟が表われ、しかも1辺1mを超える大型柱掘形柱穴で構成され、建物の方向をそろえた掘立柱は、多くの緑釉

陶器の出土等と考えあわせると一般集落とは考えがたい。これらの建物の一部は、天曆元年(947)～長元8年(1035)まで「尾上長」(おのえのかみ)と称された外宮祢宜、度会康平、彦晴、貞雄等の祢宜層の居住地であったとも考えられる。

○簀子(すゐ)橋道標

簀子橋は、勢田川の錦水橋と小田橋の間に掛かる橋で、勢田川改修により1986年(昭和61年度)に架け替えられた。その傍に1847年(弘化4)銘の道標が立っていたが、この改修で、銘板を道路面に埋め込み、道標は、小田橋よりに移設した。

○小田橋・旧参宮街道・間の山

小田橋も、勢田川の改修により、1987(昭和62年度)に架け替えられた橋で旧参宮街道沿いにある。

岡本町と尾上町の境をなす勢田川にかけられた橋で、江戸時代までは本橋の横に小橋がかかり、間の山を通過して古市へ通ずる外宮と内宮をつなぐ重要な位置にあった。

またこの橋の欄干は、かつては江戸時代の大奥に絶大な権威をほこっていた春日局が、寛永18年(1641)に神宮に参拝したとき寄進したという青銅の擬宝珠をいただいていた。

橋の手前、右手に、伊勢文化会議所の建立した案内板が建っている。

◎田上大水神社(豊受大神宮摂社)

祭神 神主小事 鎮座地 伊勢市藤里町

御料田のうしろ、こんもりとした木のしげった丘の上にある車塚1号墳(前方後円墳か)で「丸山さん」ともいわれる。石室一部露出。周濠があったらしい。欽明朝の大神主度会4門の祖小事(飛鳥の弟)墳墓であろう。御前は小事の女宮子をまつる。

止由気大神宮儀式帳には田上神社とある。延喜大神宮式には「田上大水社」とある。

社名からみて、元来はやはり豊宮崎神田の水の神であったと思われる。

この地に度会神主の一族が漫衍するに至った後、ここに渡会氏の祖先の墳墓をいとなみ、やがてそれが度会神主の祖神信仰に移っていったものようである。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	前社東面同御垣内	貳宇
玉垣御門	猿頭門扉付		壹間
玉垣	連子板付		一重
鳥居	神明造		一基

◎田上大水御前神社（豊受大神宮摂社）祭神小事神主の女宮子この社名は儀式帳にも延喜大神宮式にもみえない社名であるが、中世になり祭祀にあずかることとなった。

宮子は時の斎内親王の御手助をした御功績によりここに奉斎されたものである。

社名の御前神という意味にはいろいろな解釈があり、古来から種々研究されている。前衛の神、侍従の神、御伴の神のような意味に解釈されるしまた、尊称であるとも、また、姫神を称する場合もある。

◎山末神社（豊受大神宮摂社） 祭神 大山津姫命

鎮座地 豊受大神宮宮域

延喜大神宮式及び神名式にのせている。

御料田の西方の外宮神域内にある。寛文再興の現地が旧地であるか疑わしいと神宮要覧ではのべている。外宮儀式帳及び延喜大神宮式には山末社とある。

祭神は、高倉山の山の末にいます神で、豊宮崎の御田口の山の神。昔から山末の堰谷に坐す神といわれ、泉の神である。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板付	壹重
鳥居	神明造	壹基

◎度会大国玉比売神社（豊受大神宮摂社）

祭神 弥豆佐佐良比売命

度会大国玉命

（二柱とも地主の神）

宮崎文庫の前の山の麓に鎮座、外宮神域の大黒谷にある。このあたりの山を高神山という。

この神は、古くから高神山を中心とする度会地方の地主の神として仰がれてきた神。この土地の国雄神として仰がれてきた。

国雄神とは、山には山の神、川には川の神があるように、国には国を支配し、そこを守護する神があると信じた信仰で、自分の生活している土地の恩恵を感謝奉斎するところから出ている信仰である。

ここの神名にいう度会という社名は、古事記にも「外宮之度相」とあるように古い地名で、もとの意味は、この地が伊勢湾の入口にあり、宮川、五十鈴川の河口をひかえた良港で、たくさんの船の渡り合う土地であることの意味をことばにあらわしたものである。

「伊勢風土記」の逸文にみえるように、天日別命を大国玉神と弥豆佐佐良比売命が手に持っている弓を橋として迎え国土を奉還された伝説がある。このいわれでこの地を「継橋郷」という。

殿舎			
正殿	神明造板葺南面		壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間玉垣連子板打	壹重
鳥居	神明造		壹基

◎伊我利神社（豊受大神宮末社） 祭神 伊我利比女命

度会大国玉比売神社と向かい合って斜め上、約10間程離れた所に鎮座。社名は外宮儀式帳には、伊我理神社とみえる。「伊我利」というのは、猪狩であって五穀を食い荒す猪を狩りたてる御神功を称えて申したものである。本社は御常供田のそばの地にあるところから、御田に関係深い神社である。

殿舎			
正殿	神明造板葺南面		壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付		壹間
玉垣	連子板付		壹重
鳥居	神明造		壹基

◎井中神社（豊受大神宮末社） 祭神 井中神

鎮座地 伊我利神社御同座

外宮儀式帳には「井中社」とあり、豊受大神宮の末社であるが、戦国争乱の時代その社地を失ったため、明治四年、伊我利神社の御社殿の中に御同座した。

豊宮崎御常供田の井泉の神としてその御神徳を仰がれた。

「神宮要覧」には、旧社地及び祭神明らかならずとある。

○旧豊宮崎文庫

慶安元年（1648年）外宮の神主ら有志が金を出しあい建てた。江戸時代、伊勢文教の中心となる。文庫内に出口延佳と足代弘訓神主の霊社がある。

出口延佳は、大阪落城の元和元年の生まれ。文録三年一月十六日、七十六歳で没した。豊受大神宮の権祢宜、伊勢の生んだ最初の国学者として有名である。

相殿に坐す足代弘訓も外宮の権祢宜である。伊勢の国学神典の研究に力を注いだ。

豊宮崎文庫は宮崎文庫ともいう。豊宮崎、宮崎はともに地名。外宮の高倉山の裾が突き出した「宮の尾崎」ということ。この地名をとり、宮崎文庫、豊宮崎文庫という。外宮の祠官や山田領師職有志の学問研究所及び図書館として建設した。

慶安元年、豊宮崎文庫を設立、その首唱者は出口延佳、奥村弘正、岩出末清の三名である。

この開設のとき、敷地から亀石発掘の奇蹟あり。この年、外宮御正殿の御屋根にめばえた桜のひこばえを採ってこの庭に植えたのが御屋根桜で今日も美しく咲いている。この『オヤネザクラ』は、1979（昭和54年）伊勢市の木に制定され、1986（昭和61年）伊勢市の天然記念物に指定された。

史跡旧豊宮崎文庫碑、孝経碑などのほか東京から里帰りした芭蕉の句碑がある。

『みちのべのむくげは馬にくはれけり ばせを』宝暦4年（754）

（その他付近の史跡等）

○千日参塔（久世戸町）

慶安三歳庚寅五月十一日くすべ村
竹山南無阿弥陀佛千日参供養
山城国四之宮河原住民為西入菩提

六字名号千日参塔とでも称すべきもの。どこへの千日参か不明であるが楠部町の、同願主の六千日参塔の銘文「奉参詣三宮六千日結願供養」から両宮・朝熊参拝のものと思われる。（三宮は参宮でなく、両宮と金剛證寺をかけてものである。）

竹山は、竹山の二字ではなく（岳）ではあるまいか。

○宇治山田駅

宇治山田駅は、1931年（昭和6年）に開業。近鉄の前身である参宮急行電鉄が終着駅として現在の伊勢市駅から延長したときに建設したものである。これは1929年（昭和4年）の第58回伊勢神宮式年遷宮を記念して開催された神都博覧会（昭和5年）会場跡地に駅舎を建てたものである。

設計 久野 節 施工 大林組
構造 鉄筋コンクリート造 三階建て 間口約120m

○錦水橋・勢田川

現在の錦水橋は、1974年（昭和49年）の七夕豪雨による勢田川改修により、昭和58年に架替えされたものである。

勢田川は、伊勢市の中央山間部鼓ヶ岳（標高355.2m）に源を発し、山間地域の雨水を集めて伊勢市街地に入り、さらに市街地や丘陵地の雨水、農耕地排水を受けて流下し、下流端、神社港を経て五十鈴川と合流した後伊勢湾に注いでいる。

流域面積 18.43 km² 流路延長 6.9 km

河川勾配 中流部 1/1500 下流部 1/2300

現在、宮川、五十鈴川、勢田川、大湊川とともに宮川水系一級河川の指定を受けている。

○光明寺

金鼓山光明寺、寺伝では天平年間（729～48）聖武天皇の勅願によって、もと前山鼓ヶ岳に創建されたという。鎌倉末期に禅僧月波恵観（結城宗広の子といわれる。）によって中興され、天台宗から臨済宗に変わっている。

結城宗広は、南朝の威勢回復を図って義良親王らとともに大湊を出帆、東国に向かったが、暴風雨により難破。光明寺に入って再挙を図るが不幸にしてこの地に倒れた。結城宗広画像、結城宗広並夫人書状、北畠親房御教書などがある。

寺の入り口左に結城宗広の墓がある。

明治維新前、山田の寺院中、この寺だけが梵鐘所持を許され「光明寺の一つ鐘」といわれた。そのことを許可した豊臣秀吉朱印状が残っている。

○世義寺

教王山神宮寺宝金剛院と称し、古義真言宗醍醐派の寺である。

草創は、天平年中（729～48）に聖武天皇の勅を奉じて、東大寺大仏鑄造の事を行基菩薩が祈請したときで、大神宮の法衆と鎮護国家の祈願所として、もと前山の亀の郷にあったと伝えられる。

毎年7月7日の護摩法要は、柴燈大護摩とよばれ、日本三大護摩として有名である。

寺宝として、治承二年（1178）7月12日銘の陶製経筒（重文）をはじめ愛染明王（県文） 十一面観世音菩薩立像（市文）がある。

○霊祭講社

1878年（明治11年）神職は、すべて神葬祭によると定められたため、祖霊社祭舎が建てられた。ここには、出口延佳の碑、足代弘訓の碑、芭蕉の句碑などがある。

『何の木の花とはしらずにほひかな ばせを』貞享5年（1688）

芭蕉は、伊勢を最低6度訪れ、伊勢の句は20数句を数えている。そのうち市内に句碑が6基現存している。そのうちの一つである。

○浜田国松邸宅跡（碑）

濱田国松邸跡は、霊祭講社の隣にあった。これは以前、参宮館という旅館があり、かつてその離れに作家の尾崎一雄が住んでいたことがあった。昭和10年、「早稲田文学」に発表した『父祖の地』に次のように書いている。

「・ ・ 私が生れたのは、宇治の五十鈴川のほとりだが、母が妹セイコ

をつれ下曾我へ帰ると共に、父と私は、山田の岡本町に移った。今、某代議士の邸になっているが、当時参宮館、相当の旅館でその離れ二間を借りた。　・　・

この某代議士が濱田国松のことである。昭和12年、時の寺内陸相と戦わした「腹切問答」は、政党が軍部に示した最後の抵抗として有名である。現在、この地に「濱田国松邸跡」の碑が建っている。

資料「お伊勢まいり」（神宮司庁）「きんてつ」（近鉄）

「伊勢の文学と歴史の散歩」（中川ただもと著）

建設省中部地方建設局三重工事事務所宮川出張所『勢田川』

「神宮摂末社巡拝」（猿田彦神社）「伊勢市教育委員会パンフ」

「伊勢郷土会資料」　「神宮美術館パンフ」

「伊勢市の石造遺物」（伊勢市教育委員会）

○勾玉池

表衛士見張所の裏にある池で、勾玉池と名づけられている。池の回りには休憩所や能楽舞台がある。池は明治22年、財団法人神苑会により造られた。以前は池一杯に蓮が生えて、夏の早朝に蓮の花が咲く音が池の静けさを破って聞えた。

蓮は仏教に関係のある植物なので、今は花菖蒲がつくられ、六月の花の盛りには見物でにぎわう。

仲秋の名月の宵、ここで神宮観月会が開かれ、同時に全国から寄せられた短歌、俳句の入選したものが神宮に伝わる冷泉流により披露される。

池の向い側の岸には、なんじゃもんじゃの木、バクチの木、花の木等めずらしい木が生えている。その他、表参道入口のバス停留所のそばのトイレ付近に、ときわまんさくなどがある。

○豊川茜稲荷神社

勾玉池の傍にある。もともとは、山田産土（うぶすな）神八社の一つで茜（あかね）社と称した。いつのころからか稲荷を勧請した。祭神は宇迦之御魂神（うかのみたまのかみ・食物をつかさどる神）である。

○清盛楠

手水舎の反対側、内部は腐っている二本の木のように見える高さ10メートル、直径3メートル。

平清盛が勅使として参向したとき、冠にさわった西側の木を切らせたという伝説がある。清盛でなく、その子重盛との説もある。勅使として清盛は三度、重盛は一度参向している。

○神楽殿

第二鳥居をくぐり抜けてすぐ右側の入母屋造りの建て物。

○行在所

齋館の奥、天皇陛下のご参拝のときのご用にあてる。

○外宮齋館

清盛楠の後の林中にある。

平常は宿衛（宮中守護）奉仕の神官がおこもりする。祭典のときは祭主大宮司、小宮司をはじめとして全神職が前夜又は前々夜の夜からおこもりをして忌み慎んでいる。勅使ご参向のときもここで参籠する。

○亀石

中の御池の中堤にかけられている大きな一枚石。この大石は亀に似ている

ところから亀石とよんでいる。

外宮の南西にある高倉山にある通称「天の岩戸」という巨石古墳の入口の岩を持ってきてかけたものと伝えられている。

◎風宮（豊受大神宮別宮）

祭神

級長津彦命
級長戸辺命

土宮の東 檜尾山の麓

もとは風社（かぜのやしろ）といった。

農業に深い関係のある風と雨の順調をお祈りする。

弘安四年の元寇の国難のとき、内宮の風日祈宮と同じく神風の御神威があらたかとなったため、伏見天皇の正応六年に宮号宣下あり。これより風宮と申し上げるようになった。

幕末、文久三年、イギリスの軍艦が近海へきたときも、これを払いのぞくことを両宮の風宮へ祈願された。

弘安の神風により、維新前は航海業者等の御祈請するもの多くあった。
殿舎 土宮に同じ

◎多賀宮（豊受大神宮別宮）

祭神

豊受大御神荒御魂

98段の石段を上ると、檜尾山に南面して御鎮座している。外宮には4つの別宮があるが、その第一の別宮である。

御魂は御神霊の働きから和御魂と荒御魂にわけられる。荒御魂は積極的進取的、活動的な御魂である。

和御魂と荒御魂の信仰は鎌倉時代から吉野時代に信仰となった。

各祭典は正宮に引き続き行なわれ、この別宮だけは本宮に続いて勅使が参向せられ奉幣の御儀が行なわれる。明治以前は丘の高いところに御鎮座していられるので高宮ともいわれた。

殿舎

正殿	神明造萱葺鐵金物打立御階付	壹宇
瑞垣御門	猿頭門扉付	壹間
瑞垣	袖繰板打	壹重
玉垣御門	猿頭門	壹間
玉垣	角柱横貫	壹重
鳥居	なし	
幄舎	切妻板葺	壹宇

石の階段には地蔵石、袖引石、袖褶石等あったが、現在はどれか不明。

◎土宮（豊受大神宮別宮）

祭神

大土乃御祖神

外宮の大宮地の地主の神としてこの大宮地を守護される神。

須佐之男神の御子大年神が、天知迦流美豆比売をめとり生まれた神で大土神ともいう。

山田ヶ原の鎮守として奉斎していたが、外宮御鎮座の後は同宮に属し、大宮土主神とした。

崇徳天皇の大治三年に宮号宣下があった。ここではじめて土宮と称するようになった。これは、この当時、度会川（宮川）の洪水がしばしばあり、被害が絶えず、力を堤防改築に注いだが、結果良好ならず、地主の神である当宮や、他の摂末社になった志等美神社、大河内神社、打懸神社の神々に祈願し加護を願い完成したため宮号をいただいた。

殿舎

正殿	神明造 萱葺 鐵金物 打立御階付 東面	壹宇
瑞垣御門	猿頭門扉付	壹間
瑞垣	袖繰板内	壹重
鳥居	神明造	壹基
帷舎	切妻板葺	壹宇

◎下御井神社（豊受大神宮所管社）

祭神 下御井鎮守神土宮の奥（南方）下部坂の谷間にある。

上御井神社に事故のあったときに本社に水を汲んでお供えする。外宮御料水の守護神、石畳の上に覆屋（社殿なし）があるばかりで、もとは多賀宮の御饌の御料水に用いた。現在は上御井の補助の御井。少宮（わかのみや）ともいう。

殿舎

覆屋	切妻板葺 東面	壹宇
玉垣	連子板内	壹重

◎豊受大神宮御正殿

祭神 豊受大御神和御魂

相殿神 東に一座

（御伴神）西に二座

皇大神宮御鎮座に遅れること481年、第二十一代天皇雄略天皇の22年、天照大御神のお告げにより、丹波の国（今の京都府の天の橋立付近）比治の真名井より、伊勢の山田原の度会の地にお迎えした。

「古事記」に、御饌津外つ宮の度相に坐す神なり、とある。皇大神宮の外つ宮が度相という地にあり、そこへお迎えしたので外つ宮という。外つ宮とは常の皇居に対し別に建てておかれ、行幸（おでまし）ある宮をいう。

神宮の場合も同じで、豊受大神宮のことを度会宮、豊受宮ともいい、内宮に対して外宮と称するようになったが、別々のものでなく内宮外宮は表裏一体のものである。

天照大御神のお召し上がりになる御饌（食物）の守護神。農業の神、五穀の神、私たちの営むすべての産業のお守りをして下さる神である。

外宮と内宮は、御神徳や御鎮座の由来の違いから殿舎の配置や板の張り

方等違いがある。

神宮の建物様式は神明造りで、皇大神宮、豊受大神宮御正殿のみ唯一神明造と称し、一般の神社の神明造と区別している。

その特徴は

- 1 柱は丸柱の堀立式で地中に埋められている。
- 2 屋根は切妻造の平入り萱葺
- 3 屋根の両側にある破風板がのびて屋根を貫き、千木となっている。内宮は内削（水平に切る。）外宮は外削（垂直に切る。）
- 4 千木にあいている風を切る穴は、内宮は二つ半、外宮は二つ
- 5 棟の上の鯉木が内宮は10本（偶数）、外宮は9本（奇数）
- 6 棟の両端の棟持柱は、内宮のものは宇治橋の内側の鳥居（20年後には関の追分へ）外宮のものは宇治橋の外側の鳥居（20年後には桑名七里の渡しの鳥居となる。）になる。計60年使う。
- 7 直線式で、必要な覆金具、飾金具には装飾や彩式がなく、素木造である。

神明造は、出雲大社の「大社造」とともに現代まで伝えられている日本の建築のうちで最も古い形式である。大社造は古代住居の形式であるのに対し、神明造は高床式の殿舎の形式が宮殿形式に発展したものである。

ドイツの有名な建築家のブルーノ・タウトは、神宮の建築はギリシャのバルテノン神殿に比すべきもので、まるで天から降ってきたような建築で日本固有文化の精髓であり、世界建築の王座であると絶賛した。

○御饌殿

御正殿の真裏（北）にある。御垣内北東にある井樓組萱葺の建物で、これは古来の床の高い穀物庫である。穀倉の建築様式が、ここに残されている。この御饌殿の階段は、一本の木をくってこしらえてある。

豊受大御神が御饌津神（食物の神様）であるので、この御殿では朝夕二度天照大御神はじめ豊受大御神、各相殿神、別宮の神々に、日々朝夕大御饌がたてまつられている。

神の食事は、朝は、春、夏8時（秋、冬9時） 夕方は、春、夏4時（秋、冬3時）である。

御饌殿の南北の扉を開き、まず天照大御神が正面に、次に豊受大御神が向かい合わせにお座りになり、両宮の相殿神、別宮の神々の順序で入る。

各々に御饌を供し、御酒をまいらせ、祝詞を奏上し、八度拝をし、それから食事をする。そのため、上御井神社で毎朝夕水を汲み、忌火屋殿で調理する。御火鑽具を使い、清浄な火を切りだし、米をふかして飯（イイ）とし土器に盛たてまつる。

○外幣殿

板垣の内、西方の隅にあり、古神宝を納める。

○一本櫛（廻櫛）

大庭の西南隅に櫛が一本立っている。昔は祭が終るとここで冠につけていた木綿（ゆう）をといてこの櫛にかけたといわれます。この櫛のことを一本櫛とか廻櫛とよんでいた。

木綿は楮（こうぞ）の皮をさらして織ったもの、現在は麻を代用している。これを冠にまいてかつらとし、穢れを去って清浄な姿をあらわすためにつけた。

○九丈殿

外宮神楽殿の西、板葺、切妻造りの建物で外宮摂社末社所管社の遥祀がここで行なわれる。

○五丈殿

九丈殿の北方にあり、板葺、切妻造りの建物で、雨天のときの修祓、また遷宮諸祭の饗膳などが行なわれる。

◎四至神（豊受大神宮所管社）

鎮座地 豊受大神宮宮域内神札授与所の西側、石原の東南の角の石畳に櫛を植え、三つ石が並ぶ。外宮の四隅、東西南北をお守りする神。四至神とは、宮廻神で外宮の神域の周囲を守る神である。

延暦儀式帳には二月十三日及び六月、九月の十八日に宮廻神を祭ることが記されている。随分古くからの神である。

不浄、穢れを守る道饗の神、道祖神、塞神などと同じような信仰の神であるように思われる。

四至とは宮の四方の意味で、大宮所に禍のないように祭られたものである。お祭のときにはこの神へも御饌や幣帛がお供えされる。

◎御酒殿（豊受大神宮所管社）

祭神

御酒殿神

鎮座地 豊受大神宮宮域内

忌火屋殿のすぐ西にある板葺、切妻造の御殿、御酒殿神は御酒殿の守護神、古来より神殿を有さず。またの名を豊宇賀能売命、造酒神である。

同座一柱 調御倉神 （宇賀能美多麻乃神）

一柱 御竈屋神 （保食神）

この神々は共に豊受大御神の御霊を祭ってある。

御竈屋は齋内親王の御膳院である御炊殿をさす。この殿社も中世までは存立せしを、廃院後御酒殿に神霊を奉遷したものである。

また、調御倉は明治五年十一月、神宮より教部省に申して御器御倉と同時に破却。その後、その神霊を御酒殿へうつし祭祀した。

昔はここで神酒を造った。いまでは六月、十二月の月次祭、十月の神嘗

祭、いわゆる三節祭に供える。

白酒、黒酒、醴酒（一夜酒）、清酒の四種類を忌火屋殿で造り、この御殿に奉納した後、祭りに供える。

○忌火屋殿

朝夕の大御饌、諸大典の神饌を調理するところ。忌火とは清浄な火である。御火鑽具で火をおこし、米を蒸して飯にして供える。御火鑽具＝舞錐式発火法による御火鑽具を使用する。これは静岡県の登呂の遺跡から発掘されたものと同じ形式で、ヒノキの板にヤマビワの心棒を摩擦して発火。神宮権祢宜の職のものが、前夜參籠齋戒して火を出すことになっている。神事をはじめ。宮中で使用するものすべてこの忌火を使用する。

◎度会国御神社（豊受大神宮摂社）

祭神 彦国見賀岐建與束命

鎮座地 豊受大神宮宮域内

社名秘止由気儀式帳には、度会之国都御神社といい、天喜廳宜には国生社神名秘書には度会国見社と記している。いずれも度会の国を支配された神をお祭りした神社であるというものである。

祭神は伊勢国造及び外宮度会神主の祖先である天日別命の子である。

（天日別命は神武天皇の功臣、伊勢の地を平定してその子孫が支配した）

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

◎大津神社（豊受大神宮末社）

祭神 葦原神

鎮座地 豊受大神宮宮域内

もと神社町大字竹鼻にあったが、明治六年現地へ移した。竹鼻の社地は不明である。同町、阿竹の箕曲氏社という説もあるが不明。

五十鈴川の河口、神社、大湊の港口の守護神である。

社名の天津とあるのは港の神であることを語っている。明治六年旧地をさがしたが明らかならず。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

○上御井神社（豊受大神宮所管社）

祭神 御井の神

鎮座地 豊受大神宮宮域内

忍穂井神社と称す。高天原の天の忍穂井からこの御井に水を移されたと伝えられる。神の水である。

宮中にあったときは宮中末社であった。毎日神官が先頭に立ち、そのあと宮掌が桶をかつぎ、水を汲みに行き、帰りは桶が先頭になり忌火屋殿へ戻る。毎日の常典御饌の御供水、不浄の近付くを禁ずる。

祭りのとき、正月の若水も汲む。応仁以後廃滅しようとしたことあり。

文禄五年造営

祭神は外宮御料水の守護神

藤岡山の麓より湧く泉。いかなる旱魃にも枯れないといわれる。

天孫降臨のとき、水取政事に奉仕した天村雲命が高天原より日向の宮居の御井に移し、伊勢の地に皇祖の御神霊を移したとき、御井を掘りおこし移したという。

現在、この社をおまいりすることは許されていない。

殿舎

覆屋	神明造井樓組板葺北面	壹宇
瑞垣御門	猿頭門扉付	壹間
瑞垣	袖繰板打	壹重
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

○外宮参拝の市

外宮へ来る一日参りの方々に、伊勢の物産を紹介し、販売するため「伊勢外宮参拝乃市」として、昔日の賑いを取り戻そうと、平成元年六月一日から、毎月（一月一日を除く）一日に開いている。場所は外宮北御門を出た所。

○小西万金丹

万金丹とは丸薬の名で、胃腸、解毒、気付け、その他の諸病に効果があるとされる極めて便利な薬のことで、江戸時代の御蔭参りに盛んな頃には、伊勢土産として参宮者に大いに喜ばれた。

小西万金丹は、延宝四年（1676）五代将軍綱吉の時代から続いている老舗である。現在の建物は、明治初期に改築されてはいるが、切妻造りの様式をよく残し、江戸時代そのままの姿を伝えている。また、ザ伊勢講の認定した「まちかど博物館」の一つで、江戸時代からの製薬道具、江戸時代の時計、乳鉢（延宝年間）など50点を展示している。

○大豊和紙工業株式会社

この大豊和紙工業株式会社が、御師龍大夫邸跡である。道路脇に「御師龍大夫跡」という碑が建っている。龍大夫の正式の名は龍野伝左衛門といい、書斎の名をとって龍尚舎ともいった。伊勢俳壇の重鎮的存在でもあり、貞亨4年(1687)十月、「笈の小文」の旅に出た芭蕉は、翌五年の二月頃伊勢を訪れ、龍尚舎に逢い、

「物の名を先(まづ)とふ蘆のわか葉哉」と詠んでいる。

これは、「草の名も所によりてかはる也 にはの蘆も伊勢のはま萩」という古歌をふまえて、蘆のわか葉は伊勢ではなんというのですか、と興じたあいさつである。

なお、この大豊和紙工業株式会社も「まちかど博物館」の一つ。和紙、製造道具、明治時代から昭和にかけての古い写真等を展示している。

○月夜見宮(豊受大神宮別宮)

祭神 月夜見命(尊)

鎮座地 伊勢市宮後1-3

月夜見尊荒御魂 創立年代不詳

皇大神宮の別宮で、北中村にある宮は、月読宮と記すに対し、豊受大御神の別宮の方は、月夜見宮と書いて区別している。

もとは摂社であったが、鎌倉時代、83代土御門天皇の承元四年に宮號宣下があってより、月夜見宮と称するようになった。(土宮の例による。)

儀式帳によると、正殿は二字とあって、御社殿は二字相並んでいたものようであったが、今は一字のみ。

殿舎

正殿	神明造萱葺鐵金物打立御階付	壹宇
瑞垣御門	猿頭門扉付	壹間
瑞垣	袖繰板内	壹重
鳥居	神明造	壹基
幄舎	切妻板葺	壹宇
宿衛舎	切妻柿葺	壹宇
修祓所	切妻板葺	壹宇

月夜見尊は、天照大御神の弟神で、月読尊と御同神である。

天照大御神の御神像は、その光華明彩六合の内に照り徹るほどと、太陽にたとえてあらわしているのが、月夜見尊の御威徳はそれに次ぐものとして、月になぞらえてたたえたものと思われる。

○高河原神社(豊受大神宮摂社) 祭神 月夜見神御魂

鎮座地 月夜見宮宮域内

戦国時代に、朝廷の力が衰え、江戸時代のはじめには福島助六の所有地となっていた。その地へ復興しようと福島氏に交渉したが成らず、現在は月夜見宮の宮域内にまつられている。

延喜神名式には、川原坐国生神社 齋宮式には、川原国生社とみえて
いる。宮川の高河原の土地開拓の守護神としてまつられたものである。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

月夜見宮が別宮に列せられた後は、摂社の順位上、度会国御神社を以て
造宮使造替の神社中に入れられるべきであるのに、本社が入れられたのは
深いわけがあってのことと思われる。

資料「お伊勢まいり」（神宮司庁）「きんてつ」（近鉄）

「伊勢の文学と歴史の散歩」（中川ただもと著）

建設省中部地方建設局三重工事事務所宮川出張所『勢田川』

「神宮摂末社巡拝」（猿田彦神社）「伊勢市教育委員会パンフ」

「伊勢郷土会資料」

「まちかど博物館まっぷ」（ザ伊勢講受入協議会）

「神宮美術館パンフ」